

【追悼】

光谷一二三氏を偲ぶ

工藤弘安*

本学会創立初期からの会員であった光谷一二三氏は長らく病氣加療中のところ、旧年5月24日、71歳の生涯を終えられた。ここに氏のご略歴と本学会へのご貢献の一端を記し、ご冥福を祈りたい。

氏は1931年新潟県の佐渡に生まれ、県立佐渡高等学校を1950年3月に卒業後上京して、翌51年6月に統計委員会事務局に奉職した。勤務のかたわら中央大学の夜間部に通い、1956年に法学士の学位を得た。当時は未だ終戦直後の混乱期で、食料も乏しく、厳しい下宿生活の中で獲得した学位であった。

統計委員会は、終戦のわが国の統計制度再建のために設立された行政委員会で、その委員長は、吉田総理の特命を帯びた大内兵衛氏であり、事務局長は大内氏の愛弟子であった美濃部亮吉氏であった。美濃部氏は空腹をかかえた若い職員を鼓舞し、その教育に労を惜しまず、夜学に通う職員には早出早退を認め、あるいは経済白書などをテキストとしたゼミをみずから主宰した。その功あって多くの人材を各方面に輩出したが、光谷氏もその一人であった。

光谷氏は、1952年統計委員会が行政管理庁統計基準部に改組された後も、引き続き総理府事務官として統計行政の仕事に従事した。その間の仕事は多岐に渡っており、筆者の記憶も定かではないが、各省庁の統計調査の審査事務、産業連関表の取りまとめ、国際統計事務などであり、光谷氏のように各省庁の統計事務の細部に通じた事務方ならではの、到底実効を期し難い仕事であった。

1961年に光谷氏は、インド政府の奨学金を得て、カルカッタにあるインド統計研究所付設の国際統計教育センターの研修生として派遣された。当時は1ドル360円の時代であり、外国留学はもとより海外出張もままならぬ状況で、これは数少ない海外出張の機会でもあった。わが国からは毎年1、2名派遣されており、帰国後わが国の統計の発展のために少なからぬ貢献をしている。一昨年亡くなられた北川豊氏は、その第一回の研修生であった（北川氏については『統計学』第83号に上田涼一会員の追悼記事がある）。

インド滞在は約半年であったが、滞在中にビルマ、タイ、フィリピン、香港を訪問し、統計機構の調査を行っている。帰国後光谷氏は、インドに負けてはいられないということで、東南アジア諸国政府統計機関からの研修生の受け入れに情熱を燃やし、現在のJICAの資金をもとに経常的な研修コースの途を拓いた。これは現在幕張にあるアジア太平洋統計研修所(SIAP)の草分けとなる仕事であった。

1964年わが国はOECDに加盟したが、加盟国としての当初の義務は、OECDに対するわが国の経済統計の取りまとめ送付であった。今日のような通信手段の未発達なかで、指定されたタイムリミットを守ることは困難を極めたが、光谷氏は国際係長として昼夜兼行でその重責を果たした。

こうして光谷氏は、1988年の退官まで約37年にわたり統計行政に専念した。存命中はまさに内外の官庁統計の生き字引として、長年にわたって培われてきた該博な知識と人的繋がり、本学会でも珍重され、関東支部の定例の研究会での氏自身の報告、各省庁や地方

* 全国統計協会連合会

〒169-0072 東京都新宿区大久保1-14-15
三辰ビル(同上連合会)

公共団体からの報告者の斡旋あるいは資料の収集等、学会に対するその貢献の数々は枚挙にいとまがない。氏の温厚な性格と丹念な仕事ぶりは、多くの会員から敬愛されたところであった。

本学会機関誌『統計学』への氏の投稿は決して多いとは言えないが、その中でも特筆すべき論考は、1958年第6号から1971年第23号まで15回にわたって連載された「戦後の官庁統計日誌」であろう。最初の2回は昨年物故された元会員の松田道夫氏の投稿であるが、この日誌は終戦直後の統計再建の足跡を、官庁保存の公文書をベースに忠実に追った記録で、情報公開今だしの当時の環境のもとでは画期的な作業であった。一見極めて無味乾燥な日誌であるが、光谷氏の緻密な考証によって初めてなされた記録である。後年官庁統計組織の度重なる改編と、当事者の転勤あるいは引退によって、それらの文書の発掘編纂は著しく困難な作業となっていることを考えると、この日誌は後世の統計家によって、得がたい史料として評価されるであろうことは疑

いえない。

また学会創立20周年記念号である『統計学』第30号では、産業連関表の項目を執筆分担している。これは氏によれば、「戦後30年間の当研究会々員による連関論の研究成果を整理、紹介し政府の作業に対する反省課題を提供する」ものであるが、詳細は省略する。なおこれには長屋政勝会員のコメントが付されている。

光谷氏は退官後1989年から全国統計協会連合会主任研究員、東洋大学非常勤講師などをつとめ、また(株)CRC総合研究所顧問として、1991年から約1年半にわたり、オマーン国の産業統計の開発に従事し、その経験を『統計学』第63号に投稿している。その記事を結んでいる「オマーン国の統計の現状を見ると、たかだか日本の1920年頃のような気がする。」という氏の独白は、歴史の重みの上にみずからを据えた氏の面目躍如たるものがあり、あらためて得がたい人材を失ったことの痛恨を極むるのみである。